

クニさんから同窓生へメッセージ

自分が信じたことは、どんどん進んでいきなさい！
止まることなく、前進しなさい！

コロナ禍だからこそ出会えた 100歳の同窓生

出合いの始まりは、2020年5月娘さんからの、同窓会へのお問い合わせでした。コロナ禍で自宅待機となり、断捨離を始め、クニさんのアルバムや助産院開業時代に使っていた道具などの中に、1枚の集合写真を発見。クニさんに伺っても最初は思い出せませんでした。写真を拡大にして見せたところ、徐々にその頃のことを鮮明に思い出していったとのこと。コロナ禍ではありましたが、戦争中に女子医大で自立を目指して学び、100歳にしてなお、目標をもって生活をしているクニさんに連絡を取り2度のインタビューをさせていただきました。会報Vol.20号に特集を掲載いたしましたところ、とてもご家族に喜んでいただき、今回は甥御さんからのメッセージをいただきました。なお、昔の写真、往診カバンなど資料室にご寄贈いただきましたものを掲載いたしましたので、ご覧ください。



ピンクはクニさんが大好きな色です

2020年8月13日撮影

略歴

大正9年(1920年)新潟生まれ
昭和13年(1938年)青年学校卒業
昭和14年(1939年)神奈川県藤沢市の病院で見習い看護師として働く
昭和16年(1941年)看護婦試験に合格(警視庁)、個人病院で働く
昭和19年(1944年)東京女子医学専門学校附属産婆養成所 入所
昭和22年(1947年)同養成所卒業
昭和24年(1949年)助産院開院
昭和36年 第1子出産を機に閉院

和田クニさん甥御さんからのメッセージ全文

和田クニは私の祖母の妹に当たります。

私自身は41歳になりますが、和田の隣の市に住んでいるため、物心ついた頃から和田を知る環境にありました。しかしながら、私の母から和田が助産師であったことを聞いていた程度で詳しく昔の話を聞く機会があったわけではありませんでした。

私の以前からの和田に対するイメージは、パワフル、アクティブ、ポジティブであります。高齢といわれる年齢になってからパソコンやプールなどを始めて、人生を自ら進んで楽しんでいる印象があります。特に海外旅行を幾度も楽しんでいる姿には圧倒されています。和田は海外でもプールに入ることが好きらしいです。

私のことになりますが、職業は税理士です。今日の多くの税制はここ数年で突然現れたものではなく過去に作られた税制で成り立っています。制定経緯等を調べるため、制定にかかわった方の書物を探して読むことがあります。仕事のために必要な作業と考え行っていることですが、古い本を手作業に行っていると過去とのつながりを実感し、歴史を知ることが税制に限ることなく重要だと考えます。

和田は当たり前のように私の前に存在しますが、改めて考えると大正生まれです。今回「同窓会会報」を読ませていただき、吉岡彌生先生との出会いや助産院での様子から、和田の歴史を初めて垣間見ることが出来ました。そこに写る和田は若く今にも喋りだしそうなほどパワーを感じました。私が持つ和田へ抱く冒頭のイメージが「点」ではなく過去からの「線」となり、厚みを増したことを実感するに至りました。

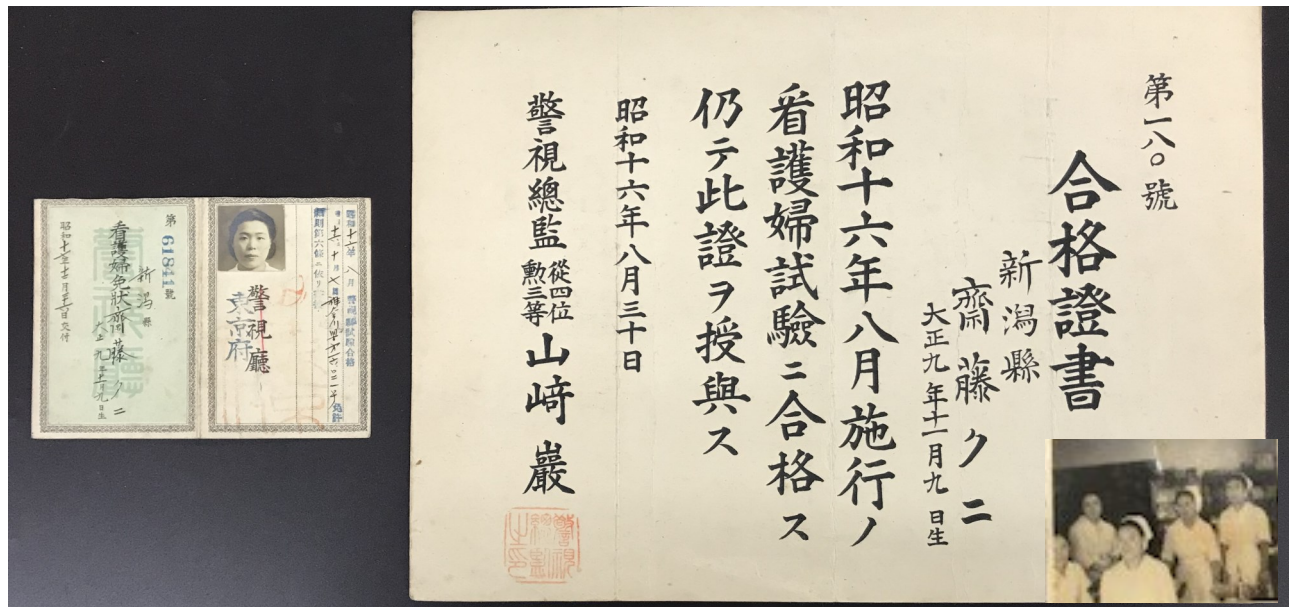
私には妻と3人の子供がいます。私は一つの区切りとしてこれからの10年間、家族や仕事に対して今まで以上に責任を伴う重要な時期と考えています。未来のことに思いを馳せると不安に思うこともありますが、「自分が信じたことは、どんどん進んでいきなさい！止まることなく、前進しなさい！」という和田のメッセージが私の背中もおしてくれるようで身に沁みます。

最後になりますが、コロナ禍ではありますが同窓会編集委員会の皆様との出会いと和田に関する記事を丁寧に作成いただいたことに親類の一人として深く感謝いたします。今後の同窓会の皆様のますますのご活躍を願うばかりです。ありがとうございました。

和田クニさんの近況

クニさんは、96歳でマレーシアに滞在中、心筋梗塞を発症まで、毎年1か月近く海外旅行に出かけ、観光というより各国の現地生活を堪能するというスタイルでパワフルに過ごしていました。COVID-19が終息したら、女子医大に来ることを楽しみにプールウォーキングを週2回通っておりまして。しかし、コロナ禍でプールに通うことも困難となり、筋力が落ちていく中で、今年の3月に転倒し大腿骨骨折をしてしまいました。手術は成功し、今は自宅療養をしています。デイケア・リハビリに通い、女子医大の地を訪れることを楽しみにしていると、娘さんからご連絡をいただきました。

東京女子医科大学に入学前_昭和16年取得後、昭和19年3月まで外科勤務



一足先に働いた同級生の友人に誘われ、新潟から上京。
藤沢本間外科にて働きながら看護婦資格を取得。その当時は、警視庁で受験。

東京女子医学専門学校附属産婆養成所に入所



当時の吉岡彌生先生と1号館のプロマイドとして販売されていたもの

この時代いろいろな婦人雑誌に吉岡彌生先生が掲載されていて、先生のお顔が載っていない雑誌はなかったほどでした。ここに行けばいいんだと迷うことなく、女子医専産婆養成所に決めました。彌生先生は雲の上の人であり憧れの的でした。アジアの留学生が彌生先生の後ろにゾロゾロと連れていたのも印象的でした。先生とお話をしたのは、入学の面接のときだけで、彌生先生は「結婚が遅くなるけどいいですか」と聞かれ、私は即答で答えたことを鮮明に覚えています。この時すでに25歳だった私を気遣ってくれたのだと思いました。

戦争中の思い出



昭和21年4月撮影

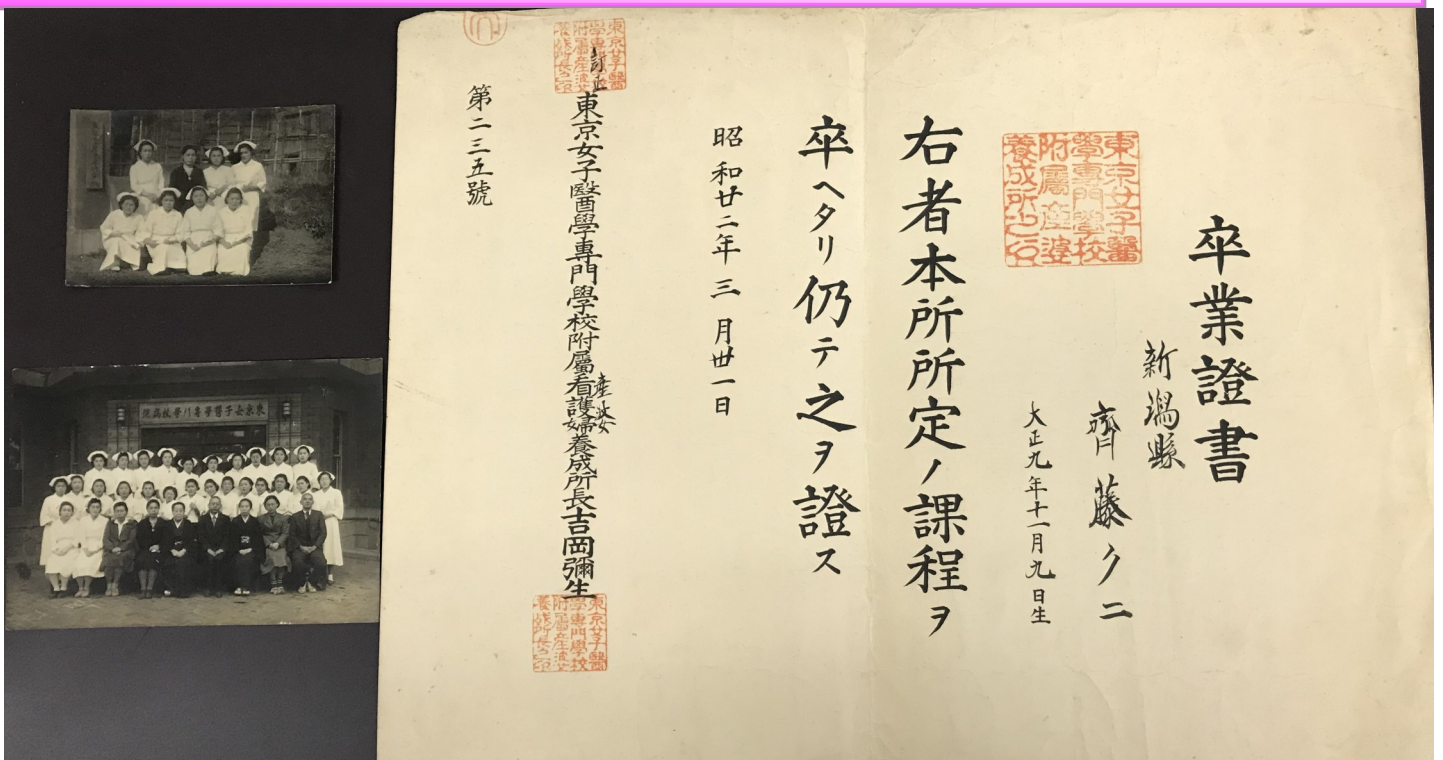


職場の仲間と 向かって右側:本人 この時代この場所で写真をとることが流行だった

1号館の向かい側に陸軍の大本営があり、トラックの荷台に豆腐や卵など積まれているのを見て、みんなで食べ物はあるところにはあるんだなあと話していました。いつも空腹だったのでうらやましく見ていました。

また、空襲があったときは、早稲田実業の柔道場に駆け込んだことも鮮明に残っている……

東京女子医学専門学校附属産看護婦・婆養成所卒業_昭和22年3月



戦争中迷うことなく自立し自活することを目指し、看護婦と産婆養成所卒業。卒業後は2年間女子医大の分娩室に勤務。助産院開設へ

助産院開設_昭和24年から昭和36年

親戚のおじさんが建ててくれたベツは1床の助産院の窓を開けると川が見えていた。助産院の近くの教会に通うようになり、そこで出会ったご主人と結婚をし、長女誕生を機に閉院。



開業時代に大事にしていたことは、「創意工夫」。

「どんな時も妊婦さんや褥婦さんにとって、どうしたらよいかを一人で一生懸命考えてやっていたいました。」と語ってくれました。



助産所開所当初から使っていたカバンや道具の一部